

アジアの友

The Asia-no Tomo

8-9

Aug.-Sept.

2011

Special Interview

(財) アジア学生文化協会 理事 金沢工業大学 学事顧問

堀 幸夫 工学博士



「ABK 同窓生募金」へのご協力をお願い

(財) アジア学生文化協会では、現在、下記の通り、「ABK 同窓生募金」を行っています。これまで長年にわたって ABK と縁を結んだ方々皆様 (留学生 OB・OG をはじめ、日本人関係者) にご協力をお願いしています。なお、ご寄付して下さった方々は、そのお名前を、金額の多寡にかかわらず、記念銘板に刻印し、長く保存させていただき考えております。また、高額寄付者への顕彰を別途用意いたします。世界的な不況の折、誠に心苦しい限りですが、何卒、ご理解とご協力を下さいますようお願い申し上げます。

財団法人アジア学生文化協会 (ASCA)

理事長 小木曾 友

募金内容

- | | |
|---------|--|
| 1. 名 称 | 同窓生募金 |
| 2. 目標額 | 50,000,000 円 (伍千万円也) |
| 3. 寄付金額 | 一口 10,000 円 <一口未満でもお受けします。但し、一口未満の時は 1000 円以上をお願いします> |
| 4. 使 途 | ABK が設立する学校法人の「運営資金」に当てる (注)
(注) 学校設立には、校舎建設資金 (約 5 億円) のほかに、教育の健全性を保証するために「運営資金」 (約 5,000 万円) を所有することが必要です。募金はそのためのものとします。 |
| 5. 募金対象 | ABK と兄弟寮に居住したことのある各国 (在日を含む) 留学生・技術研修生・日本人学生の OB/OG (約 1,000 人)、ABK 日本語コースの卒業生 (約 4,000 人)、及び ASCA の日本人職員・会員等 (約 1,000 人)、並びに本募金趣旨に賛同されるすべての皆様 |
| 6. 期 間 | 2010 年 4 月 1 日から 2 年間 |
| 7. 送金方法 | 次の 1)、2)、3) のいずれかの方法で、ご送金下さい。 |

1) クレジットカード決済による送金 (下記ウェブサイトで手続きできます)

寄付のお申し込み <http://www.abk.or.jp/abkd/fund/fund.html>

*セキュリティ上の必要から、1 回の送金は上限 300,000 円 (参拾万円也) をお願いします。

2) 銀行振込みによる送金 (下記銀行口座にお振り込み下さい)

銀 行 名	みずほ銀行 本郷支店
口座番号	普通預金 NO.2789045
口座名義	財団法人 アジア学生文化協会
住 所	東京都文京区本駒込 2-12-13 ☎ 03-3946-4121

3) 郵便振替による送金

郵便振替口座	00150-0-56754
加入者名	財団法人 アジア学生文化協会

*振替用紙は「アジアの友」に挟み込まれています

お問合せ先: (財) アジア学生文化協会 50 周年記念事業委員会事務局

〒113-8642 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館

Tel.+81-3-3946-4121 Fax.+81-3-3946-7566 E-mail: asca50com@abk.or.jp

月刊 アジアの友

2011年8-9月号 第492号

目次

巻頭

2 Special Interview

堀 幸夫 工学博士

(財) アジア学生文化協会理事 金沢工業大学 学事顧問

18 先輩に聞く

エマニエル・アディオレさん ナイジェリア

・ちょっとナイジェリア情報

26 知友会通信 奨学金情報、イベント情報

30 MEMBERS ご入会・ご寄付のご報告

31 募金途中報告

ABK 同窓生募金 (2011年7月31日現在)

<表紙写真> ABK 日本語コース・夏の研修旅行
(国宝久能山東照宮)

Special Interview



堀 幸夫

(財)アジア学生文化協会理事
金沢工業大学 学事顧問
工学博士

1927年東京生まれ。東大卒。1965年東大工学部教授となる。オイルウィップ（すべり軸受による自励振動現象）の研究で知られる。1988年日本学術振興会理事。1994年金沢工大副学長。日本潤滑学会、日本機械学会会長等歴任。1993年紫綬褒章受章、2007年日本学士院賞受賞。著作に「固体力学」（共著、岩波書店）、「流体潤滑」（養賢堂）、「Hydrodynamic Lubrication」（Springer出版）など。

東日本を襲った大震災、そしてそれに伴う原発事故。さらには経済の衰退や少子高齢化など、今の日本はその将来を左右する重大な局面に立たされているといえます。これからの日本はどのような道を歩むべきなのか。戦後、工学博士として日本の工業化の基礎を支え、当財団の理事に長い間携われてきた堀幸夫先生に、ご専門の側面から、またご自身の留学や留学生との交流経験から、これまでの日本とこれからの日本のあり方について、お話を伺いました。

大震災と原発事故に思うこと

編集部 3月11日の東日本大震災と原発の事故についてどのように思われていますか。

堀 1000年に一度の大震災、大津波が未曾有の災害をもたらしましたが、しかし、これは津波に対する認識の甘さ、巨大津波防波堤などに対する自信過剰が、また原発事故の場合は、技術に対する自信過剰が事態をさらに悪化させたのではないかと思います。自信過剰は、人を盲目にしますから。その意味では一つの日本人に対する警告とも言えるのではないのでしょうか。

2004年12月のM9.1のスマトラ島沖大地震、大津波がインドネシアをはじめ、スリランカ、インド、タイ、マレーシア、ミャンマー、それにアフリカ等の国々に広範の被害をもたらし、死者、行方不明者の数は22万人以上に上ったわけですが、その時の教訓がなぜ生かせなかったのかと今改めて思います。あれはよその国のこと、日本で同じことが起こるとはだれも思わなかったのか、或いは日本の自信過剰が日本人を盲目にしていたのだろうか。自信は持たないといけませんが、同時に慎重さとか謙虚さも必要だと思います。「日本は大丈夫」という概念が頭からあるんですね。スマトラと同じ津波が日本にも来る可能性があると思えば、打つ手はあったと思うんです。ですから、あれだけの被害を見て、仮にその時誰かがそのことを指摘しても大勢はそれを無視したかもしれませんが、誰もそう思わなかったというのが不思議なくらいです。

今回の震災による損害は非常に大きいですが、それでも物的損害は意欲さえあれば克服できるものです。今回の津波にさらわれた町

の様子は、戦災にあった街を思い出させましたね。

しかし、私は原発問題には慎重派です。仮に今回の事故がなくても核廃棄物の処理その他多くの未解決の問題が残されていますから。必要悪という考えもあるかもしれませんが、今の日本はあまりにも多消費国家になっています。ヨーロッパのホテルなどは日本に比べれば照明はずっと暗い……。太陽光、風力、地熱等の自然エネルギーには限界があるので、消費を抑えるところは抑え、対処をしてゆかなければなりません。これまでもこれからも資源の少ない日本にとって技術は大切なので、これを契機に資源の低消費技術の開発を進め世界をリードしてゆく必要があると思っています。

とにかく、今回の原発事故をなんとかうまく抑えることが出来たら、逆にそこで積んだ経験はたいへんなもので、日本の原子力技術も信頼性を増すということもあると思うんですね。だから今は福島状況を早急にかつ適切にコントロールする、ということが大事ですね。

編集部 留学生たちは「日本を信じている」と言います。

堀 「信ずる」という言い方は非情に危険なところがあります。自信過剰になったらダメですから。今度の場合で言うと、原発に関係してきた人たちが自信過剰だったと思うんです。大丈夫だと思っているということで進めた結果、ところどころに抜け穴があったということだと思うんですね。もっと慎重に考えていれば本当は大丈夫だったはずのことに失敗しているということがあるのではないのでしょうか。

自信は持たないといけませんが、同時に慎重さとか謙虚さも必要だと思います。

工学部で機械振動を研究

編集部 それでは少し、先生ご自身のことをお聞かせください。

堀 私の両親は山形出身なんです、東京に出てきてから私が生まれたので、私自身は東京生まれなんです。

編集部 ご専門は機械工学ですが、なぜその道に進まれたのですか。

堀 私は子供の時から機械いじりが好きだったんです。時計を直すとか、蓄音機やラジオを直すとか、そういうことが大好きだったんですね。それで、大学進学となった時に、父が機械科にでも行ったらどうかと言ったわけです。

大学は東京大学の工学部に進学したのですが、私が学生時代には、東大の工学部は第一と第二と二つあったんです。第二工学部は、学生を増やすために戦時中にできたんですね。それが西千葉、今の千葉大学があるところにあったんです。第二工学部はその後組織替えて生産技術研究所に変わり、場所も今の国立新美術館がある東京・六本木に移り、さらに2001年に駒場の元宇宙航空研究所があったところに引っ越したわけです。私は1948年に東大に入学しましたが、その年が第二工学部の募集があった最後の年でした。戦争が終わったこともあり翌年の1949年に第二工学部は廃止されたんです。

私は本郷にある第一工学部に入ったのですが、第一と第二は成績順に並べて一人おきにとったそうです。ですから第二工学部に入った人の中には赤門の目の前に家があるのに、千葉まで通わなければいけない人もいたわけです。そのせいかわかりませんが、第二工学

部の人はがんばって後に偉くなっている人が多いと威張ってますよ（笑）。

編集部 先生はこれまで主にベアリングについて研究されてきたのでしょうか。

堀 正確に言うと機械振動というのでしょうか。ベアリングで回転機械を支えています、その回転機械が回転するさいの振動について研究をしていました。振動を起こす原因はベアリングにあるので、ベアリングの研究と言ってもいいのですが、それに関連した回転機械、蒸気タービンとか発電機とかそういったものの振動のことを主として研究していました。振動が起こるために、大きな発電機などは長い間作れなかったんですね。昔は水力タービンというのは非常に重要でしたが、出力などは小さいですし、日本の水力発電は開発し尽くしてしまいましたから、もう発展の余地がない。その後、蒸気タービンで発電機を回して電気を起す火力発電になったわけです。最近の大きいものはみんな蒸気タービン発電機ですね。

編集部 原発の話に関連しますが、日本における水力発電というのはどうなのでしょう。

堀 今現在、水力タービンでの発電量というのは日本の発電量全体の10%ほどではないでしょうか。昔はそれが日本全部の発電量だったのですが。

例えばノルウェーのような国だったら原子力など必要なく、電力は全て水力だけで間に合います。国の面積が比較的大きくて人口が少なく、そして寒いところであって山から雪が溶けて流れてくる水がたくさんあるからです。電気代だって日本の1/10の値段ですよ。

日本は主に最初は石炭で、次に石油になって、原子力の方がまだ安いということで原子

力に変わっていったんです。ノルウェーのような国だったらみんな水力だけで間に合うんです。冬の間、大量に積もる町の歩道の雪も電気でみな溶かしています。人口がそれほど多くなく国土面積も比較的あって山があれば水力で間に合うわけです。一方、日本は人口が多く工業の規模も大きくなっていますから水力発電だけではまったく足りませんね。

アメリカ留学で感じたもの

編集部 それでは、次に留学経験についてお話しいただけますか。

堀 私は1956年の6月から1957年の8月まで、当時は東大の助教授でしたが、1年間の休暇をもらってアメリカのマサチューセッツ工科大学（MIT）に留学しました。これが最も長い留学経験です。日本には外貨がほとんどない時代でしたから留学する人もあまりいませんでした。私はフルブライトで行ったので、旅費はそこから出してもらい、現地の滞在費はMITが面倒を見てくれました。ただ、あの時は1ドル360円だったと思いますが、日本を出るときに10ドル紙幣だけ替えてもらって持って行きましたね。そして世界学生連盟のような組織の方だったと思いますが、サンフランシスコでさらに10ドル紙幣を1枚渡されましたので20ドルを持ってボストンに行ったんです。

編集部 日本が発展途上国に位置づけられていた時代ですか。

堀 発展途上国かと言えばそうかもしれませんが、しかし今いう途上国と同じかということではありませんね。戦争に負けて貧乏になってしまった、外貨がほとんどなかったという

ことは言えますが、戦時中に自力で戦闘機や戦艦を造る技術を持っていたわけで、それは今いう途上国とは比較はできませんね。向こうでフィリピンからのプロフェッサーにも会いましたが、彼も日本と母国が同じだとは言いません。当然日本のほうがはるかに進んでいる、我々は遅れていると言っていました。

編集部 少し前までの敵国で学ばれるわけですが、当時のお気持ちはいかがでしたか。

堀 その当時の旅客機はプロペラ機なんです。アメリカ本土までは燃料が足りずいっぺんに飛べないので、まず最初にウェーキ島という太平洋の島に寄って燃料を補給し、次にハワイに寄って、そしてサンフランシスコに行くというわけで、アメリカ本土到着までに24時間かかったんです。

で、アメリカについては本を読んで少しは知っているつもりでしたが、実際にどんな国なんだろう、少し前までの敵国をこの目で見てやりたいという気持ちは当然ありましたね。そうやってウェーキ島に降りてハワイに降りてサンフランシスコに飛んで行って、アメリカの西海岸の海岸線が見えた時というのは、「ついにアメリカにきたか」と思いましたよね。それは複雑な心境といえば複雑な心境ですよ（笑）。MITに行けばこういう勉強ができるかもしれないと想像しますから期待はあるわけですが、それとは別にこのあいだまで敵国であるところの海岸線をついに越えたかという複雑な気持ちはありました。

編集部 初めてのアメリカの印象はどのようなものでしたか。

堀 街の中で言えば、たくさんの自動車がピューピュー走っているというのが第一印象でした。その頃の日本はまだ車はそれほど走っ



いていませんでしたからね。しかしそれは豊かであるというよりはとにかく贅沢をしているというふうに私の目には映りました。

編集部 アメリカ人の日本人に対する対応、態度というのはどのようなものだったのでしょうか。

堀 最初に「MITの中だったら大丈夫だけど、夕方街を歩くときには一応は気をつけたほうがいい。戦争で日本人に家族を殺された人もいるんだから」ということを言われました。ただ、実際に敵意を持って接せられたりすることは一度もありませんでしたね。

私は趣味でバイオリンを習い弾いていたのですが、MITにある留学生との交流サークルが主催したパーティーに参加した時に、そこにいたアメリカ人学生から自分がビオラを弾

いているオーケストラに来ないかと誘われて、参加したことがあります。私が楽器を持っていないと言ったら楽器屋で借りてくれたり親切にしてもらいました。

編集部 日本の大学と比べたときに大きく違うものはありましたか。

堀 レベルの違いのようなものではありませんでした。授業のレベルにおいては東大だっただいたい似たようなことをやっているわけです。ただ教え方が違うということがありました。日本の場合は、今もそれは残っていますが、先生が教えるときに勝手に一人で黒板のところに行って喋って進めてしまうというやり方ですね。それがアメリカでは先生と学生の問答で進めていく感じですね。アメリカの授業は「今日はこういうことをしてく

れる機械をつくりたいと思うけど、君だったらどうしますか」と先生が学生に問う形で始まっていくわけです。

編集部 そうした違いに感心したということでしょうか。

堀 感心したというよりは、こういうやり方もあるんだと思ったということでしょうか。能率良く教えていくんだったら日本のやり方の方が、おそらく能率はいいいですね。問答でやるというのは、いちいち学生に考えさせているわけで時間がかかります。このごろフィンランドの教育がいいといってテレビで向こうの小学校の様子を紹介していましたが、やはりそうした形式での授業をしていましたね。

それからやたらと宿題が多かった。私は東大で助教授になってから留学したので、本当

は向こうの授業を受ける義務はなかったのですが、経験と思って2〜3科目受けてみたわけです。そうすると宿題がいっぱい出て、日曜日も半日はその宿題に時間を使わないと追いつかない。日本は授業をやったら後は放っぱりばなしと言ってもいいくらいですからね。そういうところはずいぶん違いますね。試験もきちっとやりますし。

だから、MIT でやっている授業というか教育というか、例えばある科目を修了しているというのは、ある最低線は知っている、ここまでは理解していますという人だけが合格となっています。日本の場合だったら、修了していてもどこまで理解しているか本当のところは怪しいということもあるじゃないですか。ただそれは日本だけじゃないんです。MIT に中国系の先生がいてその先生が我々日本人を呼んでご馳走をしてくれた時に、東洋人と西洋人の授業の仕方の比較といったことを議論したことがありました。日本や中国などの東洋の授業は、先生が勝手に話をして、学生は勉強したい人はいくらでも勉強できるし、怠けたい人は怠けてもなんとか卒業できてしまうというようなやり方だけどアメリカやヨーロッパの大学はそうじゃない。宿題が大量に出ますからすでに理解している人にとってはあれは邪魔ですよ。本当に理解したかどうかを試すような宿題ですから自分でどんどん勉強していくような学生だったらそんな宿題はやりたくないと言うでしょう。私も何回か受けてみましたが、こんなバカらしいものをと思ってもグラフを書いて出せと言われてたら日曜日の半日を使って書かないといけません。その代わり、大学として、卒業した学生には最低線ここまでの力があります、ここ

までは理解していますという保証ができるんですね。ですから良い面と悪い面があるということですよ。

日本の学問のレベル

編集部 学問のレベルというのは日本は敗戦してもまったく衰えることがなかったということでしょうか。

堀 明治以降の日本における大部分の学問はヨーロッパから、その後はアメリカから留学の形で学んできて、それによって少なくとも中進国以上になっていますよね。

私は終戦直後くらい、まだ大学に入っていなかった時、旧制の高等学校（官立東京高等学校）の時だったと思いますが、アルバイトで軍需工場に行ってそこに並んでいた大きな工作機械を賠償として中国に送り出すという仕事をやったことがあります。工場に並んでいる日本の工作機械をみんな賠償として中国に渡したというか取られたわけですね。大きな材木で枠を作って工作機械を梱包して、ステンシルで China、China と書いて送り出したわけですよ。賠償で持って行かれるものを梱包するという哀れなアルバイトです。そうやって、工場にあった機械がみんな無くなったんです。その時に、学生仲間が「日本の機械がこんなに無くなってしまって、これからどうなるんだ」と言ったら、その責任者の人が「心配することはない。あれをつくった人たちはみんな日本にいますから。」と言ったんです。技術を持った人がいれば、ものはすぐにつくれるということです。

そういう意味で言えば、戦争中だから主として軍需的なものばかりだったわけですが、

日本人は自分たちで工作機械をつくって、戦闘機や軍艦や潜水艦他の武器をつくって戦争をしていたわけですから、途上国といっても今いう途上国とは全く違うわけです。農業しなかった国かということそうではないわけですよ。

編集部 人間がいればそこから立ち直れるというのは、ある意味ベースが出来ているということですね。

堀 その意味では明治維新後の日本はずいぶんうまくやったと思います。学校制度もそうですが、小学校などは2万校くらいあるでしょう。明治4年(1871年)に文部省が出来て、そこから始まっているわけです。東大ができたのは確か明治10年(1877年)ですが、そうやって大学も東京にまずつくり、次に京都、東北とつくっていった。高度な技術力を養成する体制を明治からつくったわけですね。

人を育てることができたというのは、こうした明治からの教育制度が良かったということですよ。しかも日本は開国したばかりで、どこからも援助をもらわないでそれをやったんです。

私は明治の時代の日本人のファイトというかエネルギーがどこから出てきたのか考えることがあります。同じように終戦直後の日本人のエネルギーもそうですね。ほとんど何も無くなったところから何年かで復活させたわけですね。それに比べると今は豊かになってしまったから仕方がないと思うのですが、人々の意欲が昔ほどではないという感じがするわけです。

編集部 海外にはMITのほかにも何度かいらしているんですね。

堀 1年以上行っていたのはMITだけですが、

数日間というのはたくさんあります。ある程度まとまった滞在となると、ドイツのカールスルーエ工学大学に3ヶ月くらい交換教授として行っていたことがあります。

編集部 ドイツ語もマスターされていたんですか。

堀 マスターというわけにはいきませんが、基本的なことはわかりました。私は旧制の高等学校で理科甲類だったのですが、第一外国語は英語、第二外国語はドイツ語でした。乙類というのは第一外国語はドイツ語、数は少なかったのですが、丙類ではフランス語が第一外国語でした。

それで私は二カ国語をやったわけですが、昔の高等学校というのは今と違って、大学に入るための準備で語学、数学、物理、化学にほとんど時間を割いていて、社会などはあまりやらないわけです。ですからドイツ語は第二外国語といっても1週間に9時間もあったんです。

編集部 その時は原書を読むようなことがあったのでしょうか。

堀 昔は教授法など考えないで授業をしていますから、「アーベーツェー」と言っていたかと思うと、片方では「ゲーテとの対話」を読んで、さらにドイツ語会話までやるとか、めちゃくちゃなやり方でしたね。

当時は第一外国語を英語にする人とドイツ語にする人というのはかなり近い数いたんです。英語の方が多かったかもしれませんがドイツ語もかなり多かった。ですから今のドイツ人は非常に残念がっていますが、昔はドイツ語は有力な言語だったわけです。それはもうゲーテなどからはじまって、医学も工学もドイツはメッカでしたから。

編集部 戦時中も英語の授業はされていたんですね。

堀 よく戦時中は英語は禁止だったようなことを言われていますが、普通に授業はしていましたね。ちなみに私が高等学校に入った頃は戦争も終わりに近づいていた頃ですが、教練という軍事訓練の時間があって鉄砲を持って走るということをやっていました。ですから毎日授業がつまっていた、日曜日も午後だけが休みだったんです。

編集部 近年のコンピューターとかインターネットなどによるIT導入による社会の様々な変革は第一次産業革命よりも凄いことなのではないかと思えるのですが。

堀 京都大学の情報関連、コンピューターのことがご専門の先生に機械学会に来て講演をしてもらったことがあるんです。その時、機械専門の我々にお世辞を言ったのかもしれませんが、彼は情報といっても機械工学がないと役に立たないと言っていました。機械工学でものをつくれれば、物流を表す情報に価値が生まれるけれど、情報だけじゃ何の役にも立たないと。

マルコーニ（グリエルモ・マルコーニ；イタリア、1874-1937）という人がアメリカ大陸とヨーロッパ大陸で大西洋を越える無線通信を初めて実現しましたが、そこで電波を飛ばして連絡を取る価値が何にあったかというところ、*「今これだけのものを積んだ船がヨーロッパに向けてアメリカを出帆する」*という情報をヨーロッパの人に伝えられたということなんです。船に何が積まれていて、いつアメリカを出るのかという事実が無ければ、電波が飛んできたこと自体には何の価値もないわけ

です。この船に何をいくら積んで何月何日に出帆したという情報がヨーロッパに届けば、お金儲けに関心のある人がその情報を使っていろんなことを考え、動くわけです。だから情報自体に価値があるわけではなくて、そのバックに何があるかということを伝えるから価値があるんだと。

ITはおっしゃられた通り大革命なんです、それは裏に産業があるから役に立つわけで、必ず情報の対象になるものがそこにあり、それが重要だということです。

北海道旅行とABK

編集部 さて、次にABKとの関係について伺いしたいと思います。

堀 ABKと私の繋がりは、1958年に行われた北海道見学旅行に始まります。この旅行は、東大の教養学部にあった「アジア学生友の会」（1957年）と新星学寮に発足した「アジア学生友好会」（1957年）と東大工学部の「丁友会」（工学部の前身である工科大学の頃からある学生、教職員、OBの親睦団体）が共催、実行委員会を組織し行われました。第1回目は21日間の旅行で、引率教官4名、留学生21名、日本人学生16名で行きました。

この北海道旅行は実質的にはABKの母体である新星学寮が非常に深く関係していて、そこには当然穂積五一先生^(註)の精神的なものがいろいろなバックボーンになっていたと思うんですが、その新星学寮の学生たちが、東大工学部の丁友会の中でも留学生との交流に関心を持っている学生たちと一緒に、この北海道旅行を計画したわけですね。私はちょうどMITから戻ってきたばかりだったものですか



第2回北海道見学旅行より（右から7人目）

ら、留学してきた者は留学生の世話をするようにと言われて、この旅行に参加することになったんです。この旅行で私は、宗教の違いによる習慣、食べ物などの違いが日常の大問題であることを知らされました。参加者全員、一生の記憶に残る旅行になったと思います。

（注）1902-1981。（財）アジア学生文化協会、（財）海外技術者研修協会並びに（社）日・タイ経済協力協会創設者。

編集部 企画と資金集めに穂積先生や白倉昌明先生^(注)の紹介状を持って新星学寮の先輩の勤める企業、その他の企業を学生たちが訪問してスポンサー、寄付集めをしたという話をきいています。

（注）（当時）東大工学部機械工学科教授、東大アジア学生友好会指導教官。（後）（財）アジア学生文化協会理事。2010年逝去。

堀 そうだと思いますよ。

編集部 堀先生は最初の2回だけのご参加でしたか？

堀 私は1回目と2回目（1960年実施。23日間、引率教官4名、留学生32名、日本人学生18名）だけです。^(注)

（注）北海道見学旅行は1958年から隔年ごとに1966年までの5回実施されました。

編集部 その後先生はABKの評議員になりました。おそらくこの北海道旅行が契機だったのではないかと思います。

堀 そのあたりの経緯はあまり覚えていないのですが、北海道旅行が契機で私も新星学寮にお邪魔するようになり、直接穂積五一先生の教えを受けることになりました。先生も東大の私の部屋に見えたこともあります。先生は古武士の風格をお持ちの方であり、アジアに対するお考えには確固たるものがありましたね。アジア文化会館が出来たときの開所式



北海道に向かう列車内で（右）



北海道庁での歓迎式典で

などにも呼んでいただいていますから、そうしているうちにそういったことになったんだと思います。

穂積先生の信念がアジアの学生を引き付け、穂積精神を基礎にアジア各地にアジア文化会館同窓会ができ、タイには、1973年に泰日経経済技術振興協会ができ、そしてそれは2007年泰日工業大学開学に繋がっていますね。

編集部 1960年のABKの開所式は当時関係者の期待も大きかったようで、東京のアジア・アフリカの大使や通産大臣はじめ、産業界のトップの方々も多々参加されています。計5回に亘る北海道旅行は、係わったそれぞれの学生たちには相当なインパクトを与えたようで、参加された留学生のみなさんはその後いろいろな形で社会で活躍されていますし、ABKに対するその後の関係にも格別のものがあるように思えます。

堀 あの旅行そのものは大成功であって、本当にあれに参加した人たちには強烈なインプレッションを与えていると思いますよ。あの時代に留学生と日本人学生半々で参加していたわけですからね。

印象に残る2人の留学生

編集部 その他印象に残っている留学生に、インドのシャラーさん（Dr.Abul Sharah）という方がいらっしゃるそうですが。

堀 私が彼に初めて会ったのは駒場の留学生会館で、彼が日本に来たばかりの時でした。大学院で研究の面倒を見た学生ですが、後に渡米、その後もずっと連絡を取っています。

彼は非常に親切というか、私がヨーロッパからアメリカを回って帰国する際に、当時アメリカに住んでいた彼は、自分の下宿に泊まれと言ってくれたんです。それなら泊めてもらおうと実際に彼の下宿に行ってみるとベッドは一つしかない。どうするのかなと思っていたら、「先生はベッドに寝てください」と言ったら、自分は床に寝てしまったんです。これこそまさにホスピタリティーですよ（笑）。彼は、ミネソタ州の企業に定年まで勤めた後、母国インドの農村の貧しい人々の健康を守るための運動、IVC（International Village Clinic 国際農村巡回医療）に身を投じました。その運営資金はアメリカで集めた寄付で賄っているようで、半年インドにいて半年アメリカに

いるみたいな生活をしていて、往復する時に日本に立ち寄るわけです。その時必ず連絡が来ますから、今でも1年に1回は会っています。

彼はどうやって病院の資金を集めているかというと、アメリカで講演をして歩いているそうで、病院運営の事業に関する話をして参加者から寄付をもらう。それを半年アメリカでやって、集まったお金を持ってインドに行くんですね。すごいなあと思いますね。

編集部 もうお一人、印象に残っているインドの留学生の方がいるとのことですが。

堀 もう一人のマリックさん (Dr. Moinuddin Malik) は学者の方です。理論家の学者ですね。まだアメリカのニュージャージー州から手紙が来るのでそこで教えているんだと思います。この人は日本で1年間学びたいということで東大の私の研究室に来たんです。ところがまだ来たばかりなのにアメリカの大学の先生から手紙が来て、「この人が自分の研究室に志願しているけれど、どういう人かあなたの推薦状が欲しい」と言ってきたんです。驚いて本人に聞いてみると、私のところには1年間の予定で来たわけですが、次のところをもう探しているわけですね。アメリカ式ということなのでしょうが、仕事があっても短期契約ですからすぐ次を探さないといけない。次から次と、次のポジションを探さないといけないんですね。大変だなあと思いましたね。最初は手紙が来てびっくりしたのですが、事情を聞いてまたびっくりしたという感じですね。日本は終身雇用が基本でしたが、こうした短い契約だけで生活するとなると、本当に大変です。

アメリカの場合、労働組合があるような人はいいいのですが、研究者などは明日来なくて

いいと言われたらそれでおしまいだと思いますよね。このインドの人などは理論家ですから頭の中で考えるということでまだ何とかなりますが、実験装置を必要とするような研究だとできませんよね。この人について言うと今でもそのことが印象に残っていて、日本もいずれそういう社会になってしまうのかと思った記憶があります。実際に日本でもこの頃の若い研究者はたいてい期限付きです。そういうポジションしかないんです。

いつごろからそうになったか、とにかく人を雇ってしまうと様々な責任が生じます。ですから人を雇わないで研究費を出すとか人件費を出すとか、今はそういうやり方ですよ。それは国の研究費もみなそうになってしまうわけです。プロジェクトが終わればそれでおしまいということですよ。

私はそういう形式は良くないと思うのですが、予算を出す側から言うと非常に自由度が高いわけです。しかし今のようなやり方ですと若い人たちがみな定職を持ってないということになる。望んでる人はそれでいいのですが、望まなくてもそういうポジションしか今は事実上ないんですね。アメリカの真似なのか、日本でもそういった契約が増えているわけです。

編集部 一般社会でもそうした雇用形態は増えていますね。

堀 第一生活がきちっとしていないからローンも組めないし結婚もできない。そういう人がどんどん増えてしまう。日本はどんどんそうなっていますよ。

私はいろんなことが変わって行くのはみな悪い方向に変わって行くような印象を持っています。良いほうに変わっていることはあま

りない。その根本はアメリカの真似だと思えます。私は仮に全体の給料を5パーセントずつ下げたって、みんなの身分を安定させるべきだと思います。

開学時の精神を残す金沢工業大学

編集部 おっしゃる通りですね。次に、現在学事顧問を務められている金沢工業大学 (KIT) のことをお聞かせください。就職率も高く学生の面倒見も非常に良いということで、学生に人気の高い大学ですが。

堀 就職ということだけで言うと、1年生からキャリア教育を始めていて、人が一生社会で過ごしていく上での道筋、社会との関係について授業で教えています。卒業後の社会とのつながりを学び、個人が社会の一員として育って行くとはどういうことか、社会に対してどういうことをして、その代償として給料をもらい、家族を養って行くという、そのメカニズムを教えるんです。そういった授業はほかの大学ではあまりないのではないのでしょうか。もちろん現実の就職活動の面でも非常に熱心に世話をしています。

KIT は 1965 年の開学で、大学としてはまだ若く、建学の綱領を心得た開学時の精神が残っているというのが大きな特徴です。大学の規模は、4 学部 14 学科、学生数は 1 学年 1480 名、付置研究所 11、海外研究所 4 です。

第二代学長に京藤睦重先生という方がいて、今は亡くなってしまったのですが、この方は教育哲学を持っていた方で、全職員、500 人ほどが集まるパーティーが年 2 回あるのですが、そこで全職員に対して「大学に職を奉ずるものは全て学生にとっては教育者である」

と話したんです。用務員の人でも廊下を掃いている時はその姿で学生を教育しているんだということですね。大学で働く全ての人はいい加減な仕事は出来ませんよ。仕事の仕方を見せて自分たちも学生を教育しなければならないと思いますから。ですから学内の雰囲気は教育的に緊張したものとなりすべての人が真面目に努力しているのが特色といえます。

この学長さんについては、初めて会った時からただ者ではないと思っていたのですが、彼は当初の学歴でいうと小学校しか出ていないそうで、国鉄に勤めていたそうです。ところがもともと優秀で真面目だったからだと思うのですが、上の人がすぐに目をつけて、あなたはこんなところにはいないでもっと上の学校に行きなさいと、学校をいろいろと紹介してくれたそうです。そして年数は余計にかかったわけですが、最終的には東京工業大学を卒業し、その後金沢大学工学部の先生になって工学部長までやられて、そこを終わった時に KIT に呼ばれたそうです。そして学長になったわけですが、自分自身が苦勞人であり、一言を持っているというのでしょうか、いろんな哲学を持った人でした。

最近は若い先生が増えてきていつまでそういった雰囲気が保てるのか、ということが言われていますが、まだそういう雰囲気が残っているわけですね。大昔の話のように感じますが、実際に KIT はそういう大学なんです。

そうしたわけで、日本の私立大学の中では一種独特の評価を得ていますから大勢の人がよく見学に来るんですが、見学が終わるとみな「わかりました。だけどもねはできません」といって帰って行くというわけです (笑)。

でもこれは一つの大きな KIT の特徴だと思っ

ています。こういう話が通用するという社会はこの頃はあまりありませんからね。

産業のベースを支える理工系

編集部 近年日本の大学の工学部で定員割れが生じているという話を聞きますが。一番人気と思われる電子工学科でさえ定員割れだと。

堀 今はどこの電気科も定員割れの状況です。それは日本の電気関係の産業が活力を失っているからです。たとえば自動車産業なら一時は世界を制覇する勢いだったわけで、今はそうでもありませんが、あれは自力でやっている産業だから強い。特許のようなものもあって、それで儲けられる産業なんです。その点電気の方はどうでしょうか。

そういうわけで、私もどうしてそうなってしまったのか、具体的な要因分析はしていませんが、とにかく電気関係の産業が下火になってしまった。学生というのは将来に対して非常に敏感ですから、電気科の希望者が減ってしまったんですね。

編集部 学生というのはその時々社会状況を見ながら進学を決めるということが多くいんですね。機械工学同様、電気工学も全ての産業のベースになっている分野ですからそれが弱体化してゆくのも困りますね。

堀 工学部の学生の減少というのはアメリカでは昔からなんです。とくに白人で理工系に進むという人は進学する高校生の5パーセントほどしかいない。理学部ならまだしも工学部となると微々たるものだというんですね。ですからアメリカの工学系の大学は先生も学生も東洋人であることが非常に多いというわけです。アメリカの工学系を支えているのは

東洋系の外国人だと。ハーバードの女性教授の話では、中国系の、例えば台湾などからアメリカに働きに来ている母親が自分の息子の将来を考えた時、工学系を勉強させると。そういう人たちのおかげでアメリカの工学は成り立っていると。そういうことがアメリカの実態としてあるわけです。白人はみんなかっていい仕事に行くわけです。

私は工学系の人間だから思うのですが、理工系というのは産業のベースを支えているわけですが、経済人と言われている人たちは、我々から見ればいわばその産業活動の上澄みを持って行く人たちですよ。そのほうが効率がいいから、アメリカで言えば白人はそちらに行くというわけです。日本でもそういう人が増えてきているということです。

ただ、どの国もそういう傾向にありますから、それを何とかする、産業のベースを支えないといけないとすれば、理工系の人を増やさないといけないわけですが、それには理工系の仕事の待遇を良くするしかないわけです。しかし実際にはそれがなかなか難しい。経済界を牛耳っているのはいわば理工系以外の人たちですから。

イギリスも産業革命の後には工業国であったわけですが、今では金融の国になってしまった。次にドイツが工業国になったわけですが、それがだんだんアメリカに移って行って、そのアメリカもまたヨーロッパと似た道を歩んでいる。ロンドンで言えばシティの人たちが牛耳る、アメリカで言えばウォール街の人たちが経済を牛耳るようになってしまった。日本はまだモノづくりを維持していますが、これは日本にとって重要なことであり、その重要なことをなんとかしなければいけないと

思っています。

これは少し嫌みですが、理工系の人の努力は積み重ねて行くけれども経済界の人はみんな投機的だと。株だって何だって上がった下がったと言うだけですから。

編集部 モノづくりが斜陽傾向にある今の日本ですが、留学生が日本に来てまだまだ勉強することはあるでしょうか。

堀 あると思います。いや、あると思いたいですね(笑)。留学生にとって、日本の大学で学問を学ぶことはもちろん大事ですが、身の回りの日本人の行動も彼らには参考になると思うんです。これはよく言われましたが、震災の直後でも日本人は秩序を失わなかったんだと。その理由を学ぶことも大きな留学の意味だと思います。しかし何よりも、国全体を、文化的に、経済的に魅力ある国にすることが大切で、留学生にとって魅力ある国でなければなりませんね。

留学生を受け入れる日本人としては自信と謙虚さと両方が必要です。自信過剰はダメというのは最初の原因のこととも関係がありますね。日本の科学技術力、産業力はまだあると思うのですが、私が心配なのは人々の意欲が減退しているということです。これをなんとかすれば日本にはまだ先があると思うのですが、その意欲の減退が一番の問題です。人々が苦勞の多いものを避けるようになってきた。本来日本の長所は努力と勤勉さにあったわけで、今はそれが失われてきている。

今日本にとって何が特徴があることかと言ったら、やはり技術であり、それは世界の



ための技術でなければなりません。地球上の資源は限られているので、これからは低消費技術で世界をリードして行くことを考えたらどうかということですね。

モアイ像で有名なイースター島の教訓というのがあります。資源は限られているのにどこまでも多消費経済を続けてしまうとイースター島のように資源が何もなくなって部族同士が殺しあう状態になってしまうということです。イースター島というのは最初は何十人かの人が移り住み生活が始まったということですが、一時期は8000人くらいにまで人口が増えたそうです。しかしそれによって島に生えていた森林などの資源がみな伐採されて無くなってしまった。そうするとお互いに資源の取り合いになり、部族同士が殺しあうことになって、西洋人が初めてイースター島で見たものは部族の殺し合いだったということです。そして人口は最盛期の十分の一にまで減り、最後はモアイという8000人いた時に造った像だけが残ったと。

今のままで行けば地球全体がそうなるのではないのでしょうか。このさき人類が賢くあり



うるかは非常に心配ですね。これまでの経済というのは無駄遣いに比例したものでした。経済力と言っているのは無駄遣い量のことですよ。今世界中がアメリカ型のものを追っていて全てが無駄遣い指向になっています。もっともお互いに消費を抑えようと言っても、生産競争の今の世の中では難しいですね。

ですからなるべく少ない資源の消費で生きて行けるという技術を日本はつくり世界をリードして行く。今後日本は人口が減少の一途で困ることにもなりますが、世界的にはまだまだ人口は増えて行くでしょうから、資源は必ず足りなくなります。日本が生き残る道はそこにあるのではないかと思います。

国づくりの意欲をもう一度

編集部 留学生にとっては日本での就職というのも日本留学の魅力の一つのようですが、就職後日本の企業風土になじめず離職、外資系へ再就職するなどの話も耳にしますが。

堀 以前ある留学生がどうしても日本の企業に勤めたいと言うので、世話をしました。しばらくしてその会社から電話があって、彼はもうアメリカに行ってしまいましたけど、先生は知ってますかと言うんです。私は全く知らなかったのですが、さんざん頼んで入れてもらったのにアメリカにもっと条件のいいところがあったらパツといなくなっちゃう。そのあたりのドライな考え方は日本人よりも欧米人的なのかもしれません。

今国策として留学生数を増やしていますが、そうすると日本に残って働く留学生がだんだん増えるのかもしれませんが、それがどのくらいのパーセンテージまでなり得るのか私には予測できません。私の知っているあるアメリカの大学の学長は、アメリカに残って税金を納めてくれる人なら誰でも歓迎と言いましたが、日本の社会ではどうなのか。この学長は開けっ広げに「税金を払ってくれる人がいないと私の年金も出なくなるから」と言っていました。日本もそうかもしれません。少子化で若い人が減って、もらう人ばかり増えてしまって誰でもいいから日本に来て税金を払ってくれないと我々の年金が出なくなる。それはその通りかもしれません。

編集部 昔の留学生と今の留学生を比較して違いを感じることはありますか。

堀 北海道旅行をしたころは終戦後13～14年くらいしか経っていませんから、ほとんどの留学生の母国はまだ独立して間もない段階です。だからそういうところから来た若者はみな希望に燃えていたわけです。日本も戦後復興期で別の意味で新しい国造りに燃えていましたね。現在は多くの国が相当程度の経済発展をした結果、豊かになり、それ故国造

りの意欲は減退しているのではないでしょう
か。ですから、今の留学生も日本人学生も昔
とはずいぶん雰囲気が違いますね。

編集部 先日ラオス人で母国に職業訓練校を
作り運営している元留学生が、「自分の国のこ
とを考えられる人間を育てるのが自分の最終
目標だ」と言っていて、共感したのですが、
日本も今また、「日本をどうするのか、どうし
たいのか」を問い返す時期でもあると思いま
した。

堀 それはまさにその通りだと思います。そ
ういう意味からすると日本はアメリカに負け
て敗戦国になってしまいましたが、それまで
は自存自立でしたからね。先ほども話しまし
たが明治維新の時の日本人のエネルギーはど
こから出てきたかとちょっと不思議に思うん
です。あの時の日本人はみんな国のために
とっていた。小学校の敷地などはだいたい
村の有力者が日本の将来のために提供したと
いうくらいでしょ。そういうところからエネ
ルギーが出てきたのかなと思うんです。

明治初年の遣欧米特命全権大使の記録を本
にした「米欧回覧実記」（岩波文庫5冊）とい
う本がありますが、それを読むと彼らはアメ
リカに渡ってびっくりするわけです。あの当
時の日本人は羽織袴なわけですが、でも自尊
心だけはあるんですよ。ヨーロッパを回っ
てきて、明治以降日本の政治形態をどうい
ふにするのがいいのかを考え、あの当時の
見解ではドイツのように皇帝を置いたプロイ
セン型がいいという結論で、憲法などもプロ
イセンのものを研究したわけです。

そしてインドや東南アジアを回って帰って
来るのですが、そこで欧米の先進国がアジア
に対してやっていることを知るわけです。イ

ンドなどを植民地にしていること、中国をア
ヘン戦争で侵略していること、そうした現実
を見て、日本はうっかりしていたら同じよう
にやられてしまう、何とかしないといけない
と思って帰って来たんですね。

ですから、そういう人たちは世界情勢の中
で日本をどうすべきか、ということを悟って
いたんです。それはたいしたものですね。今、
またそれを日本人は真剣に考えないといけな
いということです。

編集部 それでは最後に日本のこれからを今
回のお話を振り返って、まとめていただい
けますか。

堀 これからの日本のために言いたいことは、
自信過剰は己を危うくする、自信と謙虚さを
ともに持つことが必要、そして、自然を侮っ
てはいけない、ということですね。

日本の科学技術力、産業力はまだまだある
と思いますが、人々の意欲の減退を一番心配
しています。苦勞の多いものを避けるようにな
ってきています。本来日本人の長所は努力
と勤勉にありましたから。

天然資源を持たない日本にとって、やはり
技術は大切です。地球上の資源には限りがある
ので、日本はこれから特に低消費技術で世
界をリードしてゆく必要があると思います。
同時に、イースター島の教訓として、多消費
経済を続けて行きつくところの悲劇を避ける
ためにも、日本人が、人類が賢くあることを
願っています。

何が幸福か、決して経済第一ではないはず
です。若い人には高い志を持ってほしいと思
います。

編集部 貴重なお話をお聞かせいただき、あ
りがとうございました。



先輩に聞く

エマニュエル・アディオレさん **ナイジェリア**

Emmanuel ADIOLE, ph.D

1994年に来日したアディオレさんは、東京大学大学院の法学政治学研究科に在籍し、エネルギーについて研究、2001年に博士号を取得しました。ナイジェリアに帰国後の現在は政府のコンサルタントを務めるとともに、国立大学で教授として教鞭をとっています。この夏、訪問研究員として来日中のアディオレさんに、留学中のお話、日本とナイジェリアの関係などについて伺いました。



日本留学のわけ

—— アディオレさんが日本に留学されたわけを聞かせてください。

私はナイジェリアのイバダン大学を卒業後、商務省で働いていましたが、公務員が利用できる政府の派遣留学生制度を利用して、アジアの国に留学したいと思っていました。最終的に日本と中国のどちらに行こうと思ったのですが、当時の中国は今のようには開放されていませんでしたから、行き先は自然と日本に決まりました。

—— 当時ほかに日本に留学する人はいたのでしょうか。

ナイジェリア人の留学先といえば欧米が当たり前で、日本に留学する人は周りにはいま

せんでした。そういった意味で、私は冒険を試みたかった、人とは違う国に行きたかったんです。それに電気製品や自動車、バイクなど、日本製品はナイジェリア人の憧れでしたから、そうした素晴らしい製品を次々と生み出す経済大国で学んでみたいと思ったんです。

—— 日本に来てカルチャーショックのようなものはありませんでしたか？

カルチャーショックはありませんでしたが、ショックだったことはいろいろあります。一つは日本人の働き方で、朝から晩まで働きすぎです。私はイギリスにもフランスにも住ん

だことがあります、日本人ほど真面目に必死に働く民族は見たことがありません。

それから忘れ難いのは日本に初めて来た日のことです。成田空港から電車で上野まで来て、そこから宿舎のアジア文化会館がある駒込駅まで向かったのですが、ちょうど帰宅時のラッシュアワーに遭遇してしまい大変な思いをしました。どこからどの電車に乗ればいいのか、どちらに向かえばいいのかまったくわからない。誰かに聞かなければと、人込みの中、緊張しながらウロウロしたことを覚えています。もちろん親切に教えてくれる人がいて、宿舎まで行くことができたわけですが、中には私が地図を片手に近づいただけで逃げてしまう人もいました。

寮に暮らし始めてからもどこかに出かけるのはチャレンジでした。地下鉄を利用することが多かったのですが、いつも出かける前に寮のスタッフに入念に行き方を聞いて、時には地図を書いてもらって出かけるようにしていました。

—— 当時、東大にはナイジェリア人留学生はいましたか。

いませんでした。ですから最初はナイジェリア大使館に出かけて、大使やスタッフから、日本のことをいろいろと教えてもらいました。大使はすごく優しい人でしたよ。ここで印象的だったのは大使館のローカルスタッフのほとんどがフィリピン人だったことです。日本に住んでいるフィリピン人は英語と日本語ができますから、大使館としても助かっていたのでしょう。スタッフのみなさんは「日本人が知らない外国人から逃げるのは当たり前だ。気にすることはない」と教えてくれました。

—— 大学院での研究テーマはエネルギー関

係ということですが。

私の専門は国際関係なのですが、ナイジェリアという国は石油、ガスという天然資源しかない国で日本とはまったく環境が異なる国です。この両国の接点は何かと考えたとき、それはエネルギーであり、自分はその研究をやろうと思ったんです。資源がない国はどのように動いているのか、資源のある国との関係はどうあるべきか、そういったことを研究したいと考えました。

—— 今はとても流暢な日本語を話されていますが、日本語はどこで学ばれたのでしょうか。

来日して最初の1年は研究生だったのですが、その時半年間、東大の日本語教育センターで勉強しました。ただ、そこで学ぶほとんどの留学生は来日前にある程度日本語を学んできている人たちで、そういう人が授業中におしゃべりをしていても先生は注意をしませんから、私もそこで真面目に勉強する気にはなれませんでした。ですから当然日本語は上手にならず、今度は自分でお金を出して、くもんの日本語教室に通いました。そこでは真面目に勉強しましたね。そのせいか先生がアメリカの大学に留学経験のある友達を紹介してくれて、その人にはボランティアで週に2回日本語を教えてもらいました。

—— 日本語学習を含めて、挫折しそうになったことはありませんでしたか。

私は諦めるということが好きではないんです(笑)。私が留学した後にナイジェリアから二人の留学生が来ましたが、二人ともすぐに日本から出て行ってしまいました。一人は半年間日本にただけでアメリカの大学に、もう一人は9月に来たのですが、10月になり寒くなると、「寂しい、帰りたい」と言い出して、

帰ってしまいました。そしてその後しばらくナイジェリアからの留学生は来なくなりました。

実は最初のナイジェリア人留学生が帰国したときは自分も少し帰国してしまおうかと迷いました。しかしまたま出会ったオーストラリア人の在日経験の長い先生が、そんな迷いを打ち消してくれたんです。先生は「もし日本のことを勉強するだけならどこの国に行ってもいい。でも日本のことを知りたかったらここで我慢するしかない」と私に教えてくれました。その言葉からは本当に勇気をもらいました。

言葉より心が大事

—— 研究室の様子はいかがでしたか。

指導教官の先生とは英語でもコミュニケーションがとれたので、日本語が不十分な時も問題はありませんでした。また、研究室は広くて、留学生もアメリカ、オーストラリア、韓国、中国などから来ていました。

—— 留学中一番大変に感じたのはどのようなことでしょう。

日本で一番ストレスを感じたのは、大学の事務スタッフの対応に対してでした。例えば何かを留学生に伝える際、「こうしてください」、「こうしないでください」と言うだけで詳しい説明をしてくれない。何を話されたのかよくわからない時もある。再度窓口に行っても冷たくあしらわれる。私が窓口に出ると、「あっ、アディオレさん、ごめんなさい」と言って担当者がカウンターから逃げないように奥に入ってしまう。そんな対応をとられたこともありました。

—— アディオレさんは国で役人という仕事を経て日本に来ましたから、物事を見る目が厳しかったということはありませんか。

たしかに私の態度は大きくて、「この黒人はどこからそんな自信が湧いてくるのか」と思われていたかもしれません。だけど、私は失礼な態度をとったことはありませんし、無理なことを言ったこともありません。

当時はおそらく留学生、特にあまり目にするものがない黒人に期待するものがなかったのかもしれませんが。私自身も、精神的に落ち着かず、自分が病気ではないかと悩むこともありました。ただ日本人チューターから「日本ではこういうことがよくある、日本人は弱者をいじめる傾向がある」と聞いて、それならば負けないように、心を強く持つことにしたんです。そして指導教官にこのことを相談しました。指導教官はその後、学部長と話をしてくれて、その内容はわかりませんが、その後は事務の人の対応にも変化がありました。

またこのことがきっかけになったのか、しばらくして女性の留学生担当者がやって来ました。彼女はとにかく親切に、一つ一つのお知らせについてもきちんとその理由を説明してくれました。英語で説明してくれるので、よくわかるのはもちろんですが、それよりも嬉しかったのは説明に心がこもっていたということです。だから言葉の行き違いだけではないんです。日本語だけでも、一生懸命、心を込めて説明をしてくれば、必ず伝わりますし、私も嫌悪感を抱くことはなかったと思います。

—— では、今の大学や留学生の様子を見て、どのように感じますか。

私は今の留学生たちともよく話をします

が、みんな楽しく、自信を持って日本で暮らしているという印象を受けます。また、大学の食堂など、以前は誰か友達と行かなかったら一人で食べるのが当たり前でしたが、今は私が一人で食べていると隣に来て話しかけてくる人が大勢います。あまりの変わりように、はじめは外国人に優しくするよう、誰かが指示を出しているかと思ったくらいです。これは日本の大きな進歩だと思います。



—— 私たちも気付かない間に、日本人はグローバル化しているということでしょうか。

大学の外でもそうですよ。私は夜遅くにコンビニに出かけますが、私を見ても誰も怖がらない。以前なら私を見かけて慌ててドアを閉めたり、すれ違う人の視線からも私を怖がっているという感じが伝わってきましたが、今回はそういったものを感じないんです。ですから今回の来日では街の変化より、人の変化を感じました。日本人はとても洗練されたというのでしょうか。外国人ともごく普通に、堂々と付き合っているように感じます。

ナイジェリア人の日本留学は

—— ナイジェリアでは日本の大卒者に対してどのような評価がされるのでしょうか。

高品質の製品を次々と生み出す日本人は“天才”というイメージがありますから、私が日本で学位をとったと言うと、みんな「すごい」とびっくりします。「本当に日本の大学を出たんですか？」と。日本というのはナイジェリ

ア人からするとまったくの別世界で、その世界にどうやれば入れるのか、ナイジェリア人は想像すら出来ないんです。

だから最近では相談が毎日あります。自分の子供も日本に留学させたいけれど、どうすればいいのかと。お金持ちで、子供に工学・科学分野の教育をさせたいという親の中には、日本に行けるのなら行かせたいと思っているケースが少なくないんです。

また、親が海外に子供を留学させたい理由はいくつかあって、その主なものはナイジェリアの大学には4年間で卒業できるという保証が全くないということです。先生がストライキを頻繁にしますから、何も悪くないのに卒業まで10年かかる学生もいます。

—— 最近のナイジェリア人学生は主にどこの国に留学しているのでしょうか。

ナイジェリア人が最も多く留学しているのはやはりイギリスで、イギリスの大学はナイジェリアまで学生を募集しに来ています。シンガポールやマレーシアも頻繁に留学フェアを開催しており、人気があります。最近では経済関係が強まる中国に行く人も増えています。



アメリカの場合はテロの問題などで大学に入學できてもビザがもらえなかったり、ナイジェリア人留学生がおかしなグループに誘われて犯罪に走ってしまうケースなどもあって、以前に比べて人気は落ちているようです。特にイスラム系の若者に最近人気があるのはマレーシアですね。トルコ、スーダン、エジプトなどに行く人もいます。

—— ナイジェリア人留学生が日本に来る場合、日本語や生活の面は大丈夫でしょうか。

言葉の問題は第一ではありません。実際にトルコや中国は英語の国ではありません。

それに私が留学生だった頃とは違って、今はどこの大学にも留学生の話を真面目に聞いて世話をしてくれる留学生セクションがあります。大学内の生活についても、例えば東大にはどんな建物にも一つのカフェがあり、以前のように限られた食堂に並んで順番を待つ必要はありません。みそ汁とご飯が嫌いなら、

ほかにいくらでも自分の食べたい料理を選べます。東大にはムスリム向けの食事も用意されていますし、ナイジェリア人が大学生活で苦勞することはないと思います。

ナイジェリアで日本は

—— 中国は孔子学院の開設をはじめナイジェリアでも積極的な中国語教育を始めているようですが、日本語についてはいかがでしょう。

中国政府の協力でいくつかの国立大学でも中国語教育がはじまりました。日本語教育については残念ながら組織的に行っている機関はありません。私も可能であればナイジェリアで日本語教育をやりたいと思っていますが、問題は時間とお金です。特に先生を連れて来るのは簡単ではありません。以前日本の関係機関の方に相談をしたことがありますが、ボランティアを派遣するにもナイジェリアは危険すぎて難しいという意見でした。

—— 日本人は慎重すぎて他の国に出し抜かれているという印象がありますね。ナイジェリアで日本のプレゼンスを高めるためにはどうすればいいのでしょうか。

今ナイジェリアが求めている援助は教育です。日本のODA援助では小学校や病院をつくらせてくれましたが、一番の問題は建物ではないんです。病院があってもそこに日本人医師がいるわけではない。そこに勤める医師と看護師を育てなければならぬ。日本製の機械をもらってもそれを動かせるエンジニアがいなければ役に立たないんです。

日本政府の奨学生になるチャンスはナイジェリアから毎年一人、二人だけです。例えば1億円で建物をつくる代わりに、その何割か

を授業料として援助してくれれば、いったい何百人のナイジェリア人が日本に来て勉強できるのかと思います。

—— 日本企業も今のところは消極的のようですね。

日本企業は90年代になってナイジェリアからどんどん出て行ってしまいました。その理由には電力不足などインフラの問題も少なくはないとは思いますが、一番問題なのは汚職や収賄といった corruption です。実際に仕事をする自分たちが1000ドルしかもらっていないのに、間に入っただけの者が9000ドルを儲ける。こんな社会ではビジネスを諦めたくもなるでしょう。今は政府に汚職取り締まり局があり、以前に比べだいぶ減ってはいますが、まだまだ多いのが現実です。

—— 一方で中国人はたくましく、今では数万人もの人がナイジェリアで仕事をしていると聞きます。

隣に中国人が住んでいても不思議ではないほど、多くの中国人がナイジェリアに住み仕事をしています。今のナイジェリアでは、東アジアの人は日本人も韓国人もみな中国人だと思われまふよ。そのため労働現場における中国人とナイジェリア人のトラブルも多く、中国人に対して嫌悪感を抱く人もいます。しかしそれ以上にナイジェリア人は、経済支援などで中国に助けられているという印象を持っていますから、大きな問題にはならないんです。

日本については外向的にはとても仲が良いと言えますが、日本のプレゼンスが大きかった70年代から80年代には遠く及ばないという状況です。

—— そういった現状の中、今もまだ日本ブ

ランドに対する評価というのはあるのでしょうか。

もちろんまだ日本の製品というのは別格です。以前と違って中国製やマレーシア製のものが増え、さらに日本企業が撤退したこともあり日本製品を手に入れるのが難しくなりました。以前はトロピカライズといって自動車などもナイジェリア仕様にしたものがあったのですが、今ではそうしたものはなくなり、中東やインドなどを經由して入ってくるものがほとんどです。そのため逆に日本製品に対する憧れや評価は高まっているんです。

—— では日本で博士号を取得したということで、帰国後はいろいろなチャンスがあったと思うのですが、なぜ大学で教えることを選んだのでしょうか。

まずナイジェリアの生活について説明しますが、ナイジェリアの生活を単純に日本と比べることは出来ません。あるレベルの生活を維持しようとする、ナイジェリアの生活費は日本よりも高くなります。例えば電気の供給が不安定ですから、自分の家でガソリンやディーゼルを買って発電をしないといけません。水道も頻繁に止まりますから、井戸を掘ってろ過しています。また交通インフラも悪いので、どこに行くにも車で出かけないといけません。それなりの生活をするには何をするにもお金がかかります。

ですから、お金はいくらでもあるに越したことはないのですが、私がアカデミックな仕事を選んだのは、若い人を育てたいという理由はもちろん、一定の所得を得ながらも自由な時間が持てるからです。サラリーマンなら毎日決まった時間会社にはいないといけません。が、大学教授なら休みもありますから、自分

のやりたいことができます。また、政府や企業を問わず、自分の意見を述べる事が出来ますね。そういった自由に動ける点に魅力を感じたんです。

原発問題のとらえ方

—— さて、いま日本は原発の問題で様々な議論がなされていますが、アディオレさんは今回のことをどのように考えていますか。

私の考えは、騒がずに今がんばっている日本の専門家に任せましょうということです。福島という場所は確かに気の毒なのですが、あまり騒ぎ過ぎると放射能ではなく、精神的な不安が原因で体調を崩す人が出てきてしまいます。必要な情報は伝えないといけません。そうでないものまで伝えて人々の不安をあおる必要はありません。私から見れば、日本政府は十分に情報を公開していると思います。

また、この原発問題を解決するためにアメリカやフランス、ドイツなどからの技術が導入され日本がそれらを総合して対処にあたっています。そしてその結果新しい知識・技術が生まれ、日本から原発の技術を導入している国の安全性が高まる。事故はマイナス面は大きいのですが、そればかりではないんです。

また今回の事故が原因で、国民が原発にノーを突きつけ、原子力の研究をする学生がいなくなってしまうことのほうが私は心配です。まったく原子力発電がなくなると、世界は100年前に戻ってしまうでしょう。さらにこの技術がテロリストの手に入ればどうなるか。原子力の研究を止めたらテロリストをコントロールすることもできなくなるということです。

完璧なエンジニアなど世の中にはいませんよ。エンジニアリングというのは、実際にやりながら学ばなければならないんです。AとBを混ぜるとどうなるか。それは混ぜてみないとわかりません。初めてのコンピューターは一部屋に入りきらないほど大きなものでしたが、今はボールペンのような小ささで、より高性能なコンピューターがありますよね。私は原子力発電もそこまで発展することを期待して見えています。

—— 最後に、日本に留学して良かったと言えますか。

正直、良かった悪かったを判断するのは難しいですね。言えるのは、日本に来なくても日本の勉強はできたかもしれませんが、今のような日本専門家にはなれなかったということです。辛かったときに、途中で諦めて帰国していたら日本に来たことを後悔していたと思いますが、無事修了し博士もとれましたから、目的は達成しました。その点はとても良かったということです。

欧米に留学していた人が私と違うのは、彼らはたくさんのお土産を持ってナイジェリアに帰国するということです。それは企業をはじめ、様々なコネや仕事の依頼などです。アフリカに関心の薄い日本からはそうしたお土産は持ち帰れません。

だから私の夢はナイジェリアはもちろん、西アフリカと日本の関係を強くしていきたいということです。今までは提案するだけの立場でしたが、できればこれからはより具体的に動ける立場になって、今の両国の距離を埋めるお手伝いができればと思っています。

—— 期待しております。ありがとうございました。



ちょっとナイジェリア 情報

ナイジェリアはアフリカの西部に位置する国。首都はアブジャ。最大の都市はラゴス。国土面積は日本の2.5倍ほどで、人口はおよそ1億6000万人。人口は30年前と比べて2倍以上になっている。民族は北部のハウサ族、フラニ族、南西部のヨルバ族、南東部のイボ族をはじめ200以上。公用語は旧宗主国（イギリス）の言語である英語であり、議会では多数派であるハウサ語、ヨルバ語、イボ語の使用のみが認められている。連邦共和国家制で36の州があるが、米国のように独立したのではなく中央政府が管理をしている。宗教はイスラム教徒とキリスト教徒が国民の9割を占め、残りの1割が土着のアニミズム宗教を信仰。イスラム教徒とキリスト教徒の割合はほぼ半々。ナイジェリアの教育制度は6・3・3・4制で、最初の9年間が義務教育となっている。授業は、小学校から英語で行われている。小学校への就学率は、1993年時点で女子82%、男子は100%に達している。

イボ族の住む東部州には石油やガスなどの天然資源があり、他の地域より工業化も進んでおり、教育レベルも比較的高い。こうした事情を背景に、イボ族を主体とした東部州がピアフラ共和国として独立を求め、内戦＝ピアフラ戦争が起こった（1967年7月6日～1970年1月12日）。

戦争はピアフラ側の敗北で終わり、イスラム教徒主体のハウサ族が支配する軍事政権が誕生、長期にわたってナイジェリアの政権を握る。このためナイジェリアがイスラム教の国というイメージを持つ人は多い。

1999年に新憲法が制定され民主化がなされる。民政後、初の大統領についたキリスト教徒のオルシェグン・オバサンジョは、軍事政権下にはびこった社会の汚職・腐敗を無くすことを政策課題として掲げるものの、その状態は極めて深刻であり、十分な成果を挙げるまでにはいたらなかった。8年間大統領を務めたオバサンジョの後大統領になったのはイスラム教徒のウマル・ヤラドゥワだった。ところが彼は就任後まもなくして死亡してしまい、変わりに副大統領だったグッドラック・ジョナサンが大統領に就任、任期を引き継ぐ。そして、昨年（2010年）に行われた選挙でもジョナサンは勝ち、現在のナイジェリア大統領となっている。

ナイジェリアの現在の主な産業は石油、ガスといった天然資源であるが、トロピカルフルーツやカカオ、サトウキビ、トウモロコシなどの栽培が、種を捨てると実が育つと言われるほどの肥沃な土地で盛んに行われていた。ところが、石油危機の後、石油が高値で売れるようになるとカカオ以外の農業は衰退してしまう。石油で多額の金が入ってくるようになり、何でも金で買えばいいと、人々は真面目に農業をすることへの興味を無くしてしまったという。

経済の低迷、産業の衰退などから高度な教育を受けた若者たちが職に就けない状態が続いており、その一部はインターネット詐欺（いわゆる「ナイジェリアの手紙」詐欺）などの犯罪に係わってしまう者もいる。





しょうがくきんじょうほう 奨学金情報

■ロータリー米山記念奨学会

①学部課程奨学金

(a) 日本以外の国籍を有する者で在留資格「留
学：College Student」で日本に在留している
者、または日本の大学等に在学中で法務大臣
から「難民：Refugee」の認定を受けて日本
に在留している者

(b) 2012年4月に学部課程3・4年目（医・
歯・獣医学部は5・6年目）、高専専攻科1・
2年目、専修学校高度専門士課程3・4年目
に在籍する者

(c) 他の奨学金を受給していない者（在住の
留学生全員が受給対象になる地方自治体の
学習奨励金や学術上の貢献に対する一時的な
褒賞金、および授業料免除は奨学金とみなさ
ない）

(d) 45歳未満

(e) 博士の学位を取得している者には応募資
格がない。ただし、既に取得している博士の
学位と異なる研究をする場合には、応募資格
がある

②修士・博士課程奨学金

(a)・(c)～(e)は学部課程奨学金に同じ

(b) 2012年4月に、修士課程1・2年目、

博士課程2・3年目（医・歯・獣医学系
博士課程3・4年目）に在籍する者

給付金額（月額）：①10万円 ②14万円

給付期間：課程修了までの最長2年間

採用人数：約600名

応募方法：学校（指定校制）を通じて申し込む。

募集締切：10月15日（当日消印有効）

※ 募集要項・申込書・指定校は下記ホームペ
ージを参照

主催者連絡先：☎ 03-3434-8681

URL <http://www.rotary-yoneyama.or.jp/>

■双葉電子記念財団

対象：次の①または②のいずれかの条件に

該当し、応募にあたり学長又は研究科長・
学府長の推薦を受けることができる者。他

の奨学金との併給不可 ①給付の時期に
千葉県内の大学院博士後期課程に在籍

（2012年度の進学・進級予定者を含む）す
る大学院生（外国人留学生を含む）②

給付の時期に千葉県内に在住し県内外の
大学院博士後期課程に在籍（2012年度の進

学・進級予定者を含む）する大学院生（外国
人留学生を含む）

きゅうふきんがく げつがく げつがく ねんかん
給付金額（月額）：月額7万円（年間84万円）

きゅうふきん
給付期間：2012年4月から2013年3月までの1年間。

ぼしゅうにんすう じゃっかんめい
募集人数：若干名

おうほうほう ひとつしよるい ざいだんじむきょくあ ゆうそう
応募方法：必要書類を財団事務局宛てに郵送。
 しんせいようし か
申請用紙はホームページからダウンロード可。

ぼしゅうきかん ひつやく
募集期間：9月30日（金）必着

しゅさいしゅれんらくさき ざいだんほうじんふたばでんしきねんざいだん
主催者連絡先：財団法人双葉電子記念財団

〒297-0023 千葉県茂原市千代田町1-4-3

きょうわ
協和ビル3F ☎0475-26-0107

E-mail futabazaidan@nifty.com

URL <http://www.futaba-zaidan.org>

イベント情報

嘉悦大学・特別公開講座「アジア共同体創生へ、アジアの声を聴こう」 開講のお知らせ（講座）

こんしゅう かえつだいがく ひょういきてくべつこうかいこうざ かきよてい かいさい
 今秋、嘉悦大学の標記特別公開講座が下記予定で開催されます。

この講座には、Choi Sang Yong 氏（韓国、元駐日韓国大使、東京大学卒、法学博士）、
 Nguyen Duc Hoe 氏（ベトナム、ドンズー日本語学校校長、京都大学卒・東京大学大学院修了）、
 Wong Meng Quang 氏（シンガポール、元駐中国シンガポール大使、元駐日シンガポール公使、
 東京水産大学卒）、Bandhit Rojarayanont 氏（タイ、泰日工業大学（TNI）副学長、元TPA事務
 総長、東京工業大学卒、工学博士）、Moazzem Hussain 氏（バングラデシュ、日本商工会議所専
 務理事、元AOTS ダッカ事務所長、東京大学卒、工学博士）、Heng Fu Chong（ドイツ在住、元
 ボン大学アジア研究所講師、京都大学卒・東京大学生産技術研究所研究留学）など当協会と係わり
 の深い方々をはじめ、かつて日本に学び、現在母国で活躍している方々が講師として来日され、そ
 れぞれの歩んできた道、日本への思い、アジア共同体に寄せる期待などを日本語で語ります。なお、
 当財団法人アジア学生文化協会理事長小木曾友も講師陣に加わっています。無料公開講座ですので
 奮ってご参加ください。

かいこうきかん
■開講期間：2011年10月7日（金）～2012年1月20日（金）

かいこうにちじ まいしゅうきんようび じげん かくこうざしゅうりょうご しつぷおうとう さんかしや しんぼく
**■開講日時：毎週金曜日 4時限（14:40～16:10）（各講座終了後、質疑応答、参加者との懇親
 時間 16:30～18:30）**

かいさいしょ かえつだいがく とうきょうとこだいらし せいぶしんじゅくせん はなごがねい えきみなみぐち とほ ふん
■開催場所：嘉悦大学（東京都小平市、西武新宿線「花小金井」駅南口から徒歩7分）

もうしこ かえつだいがく とうしこ もうしこ
**■お申込み：嘉悦大学ホームページ <<http://www.kaetsu.ac.jp/>> の申込みフォームよりお申
 し込みください。**

しめ きり こご じ
■締切：9月16日（金）午後5時

てい いん せんちやく めい
■定員：先着130名

くなお、この講座は、佐藤正文氏〔（社）日・タイ経済協力協会 相談役、嘉悦大学客員教授の企画
 により実現したものです>

こうざかいせつよてい かくかい
●講座開設予定 (各回のタイトルとゲスト):

◆2011/10/07「タイとアジア共同体」バンディット・ロートアラヤノン (タイ、泰日工業大学副学長、元TPA事務総長、東京工業大学卒、工学博士) ◆2011/10/14「アジア共同体と再生可能エネルギー開発」カマルディン・アブドラ (インドネシア、ダルマ・プルサダ大学学長、東京農工大学卒、東京大学博士課程修了) ◆2011/10/21「ベトナムとアジア共同体」グエン・ドク・ホーエ (ベトナム、ドンズー日本語学校校長、京都大学卒・東京大学大学院修了) ◆2011/10/28「バングラデシュとアジア共同体」モアゼム・フセイン (バングラデシュ、日本商工会議所専務理事、前AOTSダッカ事務所長、東京大学卒) ◆2011/11/11「日印エネルギー協力の事例から見たアジア共同体」アショク・チャウラ (インド、インド国立科学コミュニケーション情報資源研究所 (NISCAIR)、立命館アジア太平洋大学客員教授、東京大学・国立国語研究所研究留学) ◆2011/11/18「シンガポールとアジア共同体」ウォン・メン・クアン (シンガポール、元駐中国シンガポール大使、元駐日シンガポール公使、東京水産大学卒) ◆2011/11/25「中国とアジア共同体」リュウ・ホウ (劉鋒) (中国、一般社団法人アジア現代経済研究所理事長、東京都立大学卒) ◆2011/12/02「EU とアジア共同体」ヘン・フ・チョン (ドイツ在住、元ボン大学アジア研究所講師、京都大学卒・東京大学生産技術研究所研究留学) ◇2011/12/09「韓国とアジア共同体」崔相龍 (韓国、法政大学特任教授、元駐日韓国大使、東京大学大学院博士課程修了) ◆2011/12/16「アジアの未来」杉浦正健 (弁護士、元法務大臣・内閣官房副長官・外務副大臣 (小泉内閣)、財団法人アジア学生文化協会 (ASCA)・財団法人海外技術者研修協会 (AOTS) 創設に参画、東京大学経済学部卒) ◆2012/01/06「ERIA とアジア共同体」西村英俊 (東アジア・アセアン経済研究センター (ERIA) 事務総長) ◆2012/01/13「アジアの友」小木曾友 (財団法人アジア学生文化協会 (ASCA) 理事長) ◆2012/01/20 @「東アジア共同体をどうつくるか」進藤栄一 (国際アジア共同体学会 (ISAC) 代表、筑波大学名誉教授) A「アジア共同体への道」佐藤洋治 (ワンアジア財団理事長)

じんりゅうがくせい とうほく ぼしゅう
アジア人留学生の東北ボランティア募集 (ボランティア)

アジア・コミュニティ・センター21 (ACC21) では、アジアの人々と被災地をつなげる支援を行うことを目的に、アジア諸国から日本に留学している学生を被災地にボランティアとして派遣しています。各地から集まる日本人ボランティアとともに汗を流して、あなたの国と日本の「架け橋」になりませんか?

★参加費・・・3,000円 (交通費の一部として) 交通費、宿泊代、装備品、ボランティア保険はACC21が負担します。食費は原則として自己負担となります。

★作業内容・・・派遣時のニーズにあわせて、現地受け入れ先と相談して活動が決まります。

例) 民家の泥出しや片付け、海岸部および山肌の漂着物の回収、思い出の写真のクリーニングなど

★日程・・・出発日 22:00 ACC21 集合。オリエンテーションを実施後、バスターミナルまで移動。23:30 夜行バスで東京出発 (新宿、池袋など)。／活動日 (1日または2日) 7:00

とうほくとうちやく かつどうち いどう 東北到着・活動地まで移動。9:00 ボランティア開始。16:00 ボランティア終了。／最終日 9:00 ボランティア開始。12:00 ボランティア終了。13:00 とうほくしゅつぱつ 東北出発。21:30 とうきょう とうちやく かいさん 東京に到着・解散 (しんじゅく いけぶくろ しんばし (新宿、池袋、新橋など))。

< 9月の派遣日程>* 10月も企画中

9月9日(金) 20:00pm とうきょう とうきょうはつ 東京発 → 12日(月) 6:30am とうきょうちやく いわてけんとうのし よてい 東京着 【岩手県遠野市(予定)】

9月16日(金) 20:00pm 東京発 → 19日(月) 6:30am 東京着 【岩手県遠野市(予定)】

9月23日(金) 20:00pm 東京発 → 26日(月) 6:30am 東京着 【岩手県遠野市(予定)】

※ さいしん にてい 最新の日程については ACC21 のホームページ www.acc21.org にてご確認ください。

主催: しゅまい とくべつかつどうほうしん 特別活動法人 アジア・コミュニティ・センター21(ACC21)

〒113-8642 とうきょうとふんきょうくほんこまごめ ぶんかかい 東京都文京区本駒込2-12-13 アジア文化会館1F

電話: 03-3945-2615 / FAX: 03-3945-2692 担当: 清水、黒柳

E-mail: tohoku@acc21.org

第9回ユネスコ記念能(舞台)

こくせき と せかい おお かつがた のうがく たの いたで 国籍を問わず、世界の多くのの方々に能楽を楽しんで頂けるよう、初めてご覧になる方にお勧めできる企画内容になっています。秋気深まるこの季節、たくさんの方々が日本の古典文化に触れてくださる機会になれば幸いです。(日英2カ国語字幕スーパー、当日プログラムと能楽入門冊子を進呈!)

■番組: ① ばんぐみ きょうげん いずみりゅう ぶっし 狂言(和泉流)「仏師」 ② 能 ほうしゅうりゅう ちくぶしま 能(宝生流)「竹生島」

■日時: にちじ 10月14日(金) かいえん 開演 18:30 (かいじょう 開場 17:30)

■場所: こくりつのがくどう ちゅうおう そうぶせん せんだがやえき げしやとほやく ふん ちかてつおおえどせん こくりつきょう 国立能楽堂(JR中央・総武線 千駄ヶ谷駅 下車徒歩約5分/地下鉄大江戸線 国立競技場駅 下車A4出口から徒歩5分)

■チケット: せき 指定A席 5,000円 せき 指定B席 4,000円 せき 一般自由席 3,000円 せき 学生自由席 1,000円

■主催・お問合せ: しゅまい とくべつかつどうほうしん にほんのがくきょうかい 日本能楽協会 ☎ 03-5925-3871 URL www.nohgaku.or.jp/

◆ 留学生無料招待(抽選100名) ◆

【募集対象】 げしゅうたいしやう がいこくせき つぎ りやうほう あ かつがた がくせい にほん こうこう 外国籍で次の両方に当てはまる方 ◎学生ビザで日本に滞在中 ◎日本の高校、短大、大学、大学院、専門学校(日本語学校を含む)に在籍中

【応募方法】 おうほうほう い か めい き 以下の①②③を明記して、Eメール(111014@nohgaku.or.jp)までお申込みください。 ① 名前、学校名、学年、国籍、日本在住年数 ② 住所・電話番号 ③ この公演案内を見た場所

【応募期間】 おうきょかん どうせんはつびょう 2011年7月25日(月)～9月26日(月)。当選発表はチケットの発送(10月上旬予定)をもってかえさせていただきます。

アジアフォーカス福岡国際映画祭 (映画)

今年で21年目を迎えるアジア映画の祭典。今年にはトルコ、イラン、インド、タイ、ベトナム、シンガポール、マレーシア、フィリピン、中国、台湾、韓国、日本の12カ国・地域から、厳しい審査を潜り抜けた上質の21作品が上映されます。



インド映画「妻は、はるか日本に」より

開催期間 9月16日(金)～9月25日(日)
会場 JR博多シティ「Tジョイ博多」ほか
チケット 1作品券 前売 1,000円 当日 1,200円／中高生 500円
 5作品券 前売 4,000円 当日 5,000円
 フリーパス券 前売 10,000円 当日 12,000円
 ★民族衣装特典 アジアの民族衣装着用の方は500円／1作品

*英語字幕、日本語生吹き替え(ヴォイスオーバー)、バリアフリー上映もあります。

主催 アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、福岡市

問合せ先 ☎ 092-262-0676 公式ホームページ www.focus-on-asia.com

MEMBERS

〈ご入会とご寄付の報告〉

2011年6月

正会員

(2口)

柳瀬 修三 タイ

(1口)

坂本 健 西東京市

内山 敦之 中野区

小山内 美江子 横浜市

平野 健一郎 保谷市

北星学園大学 札幌市

染谷 誠 坂東市

小林 貞子 横浜市

樋口 隆一 文京区

倉内 憲孝 池田市

忍足林基 江東区

山田 侃 戸田市

中西 鶴子 名古屋市

森尾 正照 北巨摩郡

山田 守一

橋本イスラムヌール 坂戸市

斎木 史 足立区

小池 都 さいたま市

井上 美和子 文京区

奈良 自起 大田区

ご寄付

大島光恵 練馬区

2011年7月

特別会員

(5口)

(株)スリーエーネットワーク

(1口) 千代田区

(株)ソフトネット 立川市

今西 淳子 文京区

松平 吉世 羽生市

(株)アイデント 狛江市

NOVEL ENTERPRISES LIMIED 香港

賛助会員

(財)国際文化交流協会 新宿区

(株)エレクトロデザイン 中央区

(株)日吉 近江八幡市

正会員

(1口)

大田原 康彦／真澄 中央区

新田 宜子 西東京市

田中 利恵子 東村山市

秦 幸吉 大田区

富岡 昭二郎 鎌倉市

三宅 宣幸 川崎市

田原 晶子 鹿児島市

高 秉沢／姜英 大阪市

リンク情報システム(株) 渋谷区

松本 誠一 文京区

脇 英親 文京区

細川 哲士 八王子市

大里 浩秋 逗子市

ご寄付

栗原 静子 気仙沼市

ご協力、ありがとう
ございました

ご報告

A B K同窓生募金 (2011年7月31日現在)



ご協力ありがとうございました。募金のご報告は『アジアの友』並びに同窓会ホームページ
< <http://www.abk.or.jp/abkd/fund/houmei roku.html> >で随時ご報告させていただきます。

●目標額：5,000万円

●募金額：14,525,113円

●寄付者数：303件

〈 〉内は出身・在住国、地域、ABC順。日本のみ五十音順

〈中国〉魏慶鼎

〈日本〉小木曾友、工藤幹雄、田中利恵子、戸田清、新田宣子、森尾正照、山田守一

〈韓国〉韓英鳩

〈ベトナム〉ドンズー日本語学校

以上、6件

2011年5月31日以前の寄付者(293件)

〈ブラジル〉セキヤ タチバナ、フランシスコ ヒロノリ イシハラ、ミズマアイコ タチバナ

〈バングラデシュ〉A.K.M. Moazzem Hussain、橋本イスラム・ヌルール

〈中国〉戴志堅(在日)、李惠春、劉越(在日)、劉明華、沙蓮香、倪玉、孟令樺・計宇生(在日)、賈輔忠、蔡堅平、郭南燕、李春利、Meng Xiao Xiao、全浩、Zhou Xiang、可軍(広中軍二)、呂新一、Ou Yang Fei 欧陽菲(在日)、Wang Wen 王穩

〈カナダ〉張素華(香港)

〈香港〉Choi Man Wa 蔡敏華、梁志瞬、YEUNG KING HONG 楊經航 / 蔡金燕(マレーシア)

〈インド〉AAAWI(AOTS Alumni Association of Western India)、ABK-AOTS Dosokai Chennai Center、A. P. Wagle、Abul Sharah、Ashok Saraf、雅留宮久磨(在日)/澄子(日本)、M. Ramamurthy

〈インドネシア〉Budhi Setiawan Kohar

〈カンボジア〉忍足林基 / 美恵子(日本)

〈日本〉新井重光、池添尚行、池野朋彦・晶子、池森亮介、伊佐玲子、石井信彦、石原誉慎、石原廣、稲垣敏彦、井上恵子、井上駿、伊藤源之、伊藤順、岩尾明、岩佐佳英、上高子、植田泰史、畝本昌介、漆寫才子、大久保伸枝、大谷里恵子、大村光、小木曾建(3)、小木曾大、小木曾友(2)、奥山節子、奥山義夫、小野寺武夫、小原正敏、加倉井弘行、勝部純基、河合秀高、川上剛、川崎依邦、北マツ、北川泰弘、北原千絵、北山文泰、久津間優子、工藤正司、工藤幹夫(2)、久保哲也、栗原静子、黒田一雄、香月恵美子、小林泰子、金野隆光(2)、早乙女和義・博子、酒井杏郎、佐藤正文(2)、佐藤玲、渋谷寧伸、清水勇治・泰代、尚美学園大学国際交流センター、白石勤、鈴木八重子、栖原暁、高木桂子、高道俊彦(2)、高野靖子、高橋喜久江、高橋作太郎、高柳直正、田川明子、田口昌子、竹嶋俊紀、竹田肇・和子、竹林惟允、田中多美子、田中稔子・静子、田中美智子、谷口哲雄、田守智恵子(2)、近山武子、土屋幸子、鶴尾能子、鴛田純一・由美、堤祐子、外山

経子(5)、中曽根信(2)、中島正喜、中原和夫、西垣宰朋、西嶋勝彦、西谷隆義、西原彰一、西村清人、西本梶、忍足給美、忍足眞理、野村美知子、秦幸吉、濱田洋子、林均、樋川好美、平井まりこ、平岡明子、平峯克、福譲二、藤原一枝、布施知子、細川哲士、堀香奈美、堀幸夫、堀内智代子、槇操、牧美保子、松井正枝、松岡弘、松崎松平、宮内俊治、村山秀男、鮫下勝、山海保、山口憲明(2)、山崎光郎、山之内正彦・萩子、湯山佳代、依田良子、吉田菜穂子、吉田裕子、吉原エツ子、六文会、渡辺譲二、匿名希望(3名)、50周年委員会売上

〈韓国〉韓英鳩、崔銀珠、Oh Bum Suk、Youn Seong Kook 尹誠國

〈マレーシア〉Ang Wan Leng、Beh Teck Chuan、CHANG CHEW CHIN 張昭成、CHEW CHONG SENG 周昌盛、CHIA LITECK 謝礼得、Chiu Jin Eng 冰周人英 / 林惠冰、CHONG TECK FOO 張德福、EE LEY TIONG 余勵忠、FOO MING LIAN 符明蓮、FOO SIANG SENG 符祥盛、FOO SOO KONG 符素光、HEONG SEE YONG 香世運、KENNETH WONG 黃復翔、LEE KIAN LING 李建霖、LEE KONG/LAM CHOK YAK、LEE MIOU YING 李妙英、Lee Tee Boon、LEONG KEE HUO 梁其和、LIEW TECK BOON 劉德文、Lim Hock Lai、LIM SIN YEAN 林欣燕、LOKE HON YEE 陸漢宇、LOW KIM LEE 劉金莉、NG TIAN ENG 黃殿英、ONG CHENG CHUAN 王清川、ONG CHOOI LEE 王翠莉、PANG CHOON BOON 彭俊文、POH SIEW HUI 傅秀慧、Seah Boon Chieng、SIM KEE HONG 沈其豐、Soon Sai Kheng、SOO SECK HENG 蘇錫興、SU KUI SHENG 蘇桂昇、Tan Cheet Yong、TAN KEEHANG 陳繼漢、Tan See Seng 陳時生、TAN SOO SIN 陳素芯、Tan Wee Pin、Tan Wee Seng、TANG ENG HUAT 陳永發、TENG KIM YIN 鄧錦雲、TEO KWEE SWEE 張貴水、Tiang Chuan Seong 鄭俊雄 Toh Leong Chee、WONG FEE PING 黃慧萍、WONG SENG KENG 黃成耕、WONG TZONG CHYANG 黃宗強

〈ミャンマー〉Aung Kyaw

〈ペルー〉Olga Shimada Keiko

〈パキスタン〉A.R.Siddiqi

〈シンガポール〉Foo Choo Wei、顏尚強、王堯其

〈台湾〉Chen Ai Chi 陳艾圻、Liu Li Mei

〈タイ〉浅見博子、Bandihit Rojarayanont、Chamlong Srimuang、Chanintorn Mekaratana、Chovet Yimsirikul、Ditdi Chatputtongul、Gannnigar Koontanakulvong、神崎ソラダ(在日)、Kornkeo Praisontarangkul、Krisada Visavateeranon、Meena Thamchaipenet、Mongkol Pianapitham、Navarat Srisuponvanit、Niramai Thanatavee、小野崎忠士(日本)、Patamavadee (Bongsayan) Narushiso、Phiphat Chaichanavichakij、Pholchai Limvipuvadh、Pilaipan Mekaratana(2)、Pisan Thanatavee、Pornanong Niyomka H.、Prayad Kongkasawad、Prayoon Shiowatana、Saowanee Patrakarn、Sathida Mekaratana、新宅光、Sivaporn Sirilattthayakorn、Sucharit Koontanakulvong、Suchittra Hunbuncharkit(2)、Supong Chayutsahakij、Suthee Chutchaiwett Suvit Vibulsresth、Tana Tangtrongsakdi、泰日経済技術振興協会、泰日工業大学 (THAI-NICHI INSTITUTE OF TECHNOLOGY)、Vachiranee Limvipuvadh、Vachiraporn Limvipuvadh、Virat Thiravathanavong、Wannadee O'sorup、Wiwut Tanthapanichakoon、柳瀬修三、Yoshiko Limvipuvadh

〈アメリカ〉宮下偉路(趙偉路; 中国・日本)

〈ベトナム〉Dao Thi Minh、Le Quynh Chi、To Buu Luong、Nguyen An Trung、Tran Thanh Viet

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名称 財団法人アジア学生文化協会

ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION

(ASCA)

所在地 東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者 理事長 小本曾 友

設立 1957年(昭和32年)9月18日

故郷精一氏創設

目的 日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◆主な事業◆

- (1) 留学生宿舎の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営(進学希望者向けの日本語を中心とする教育)
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◆会費(年額)◆

正会員 1口 1万円

賛助会員 1口 5万円

特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円(学生2千円)でお送りしています。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

後記

タイ国ABK-AOTS同窓会主催、TPA、TNI共催で当協会の日本語学校校舎の建設のための資金を集める会「One Night at Asia Bunka Kaikan (ABK)」を10月16日(日)にタイ・バンコクで開催するとの連絡が入りました。(裏表紙のポスター参照)すでに、タイからはTPA、TNIをはじめ個人からもたくさんのご寄付をいただいています。改めて感謝!感謝!です。そこで、この機会に、会員の皆様とともにタイへ出掛け、この会に参加し、更にTPA、TNIを訪問し当協会の関連機関のご紹介をしよう、と、急遽タイへのツアーを企画いたしました。募集期間が大変短くなり恐縮ですが、たくさんの方がご参加くださることを願っています。また、現地での参加も大歓迎です。

当協会の役員、及び評議委員の方々は、協会の設立にご尽力された方をはじめ大学の関係者が多く、2年前、93歳で逝かれた金丸三郎先生、昨年、90歳で逝かれた白倉昌明東大名譽教授、本年93歳で逝かれた塚崎潤先生をはじめ長年お世話になってきた先生方々とは、会議でお目にかかるのみで、親しくお話を伺う機会もないまま大変残念なことをいたしました。今回のSPECIAL INTERVIEWは、20代から当協会と関わってこられた塚幸夫東京大学名誉教授(現金沢工業大学学事顧問)に貴重なお話と曲がり角に来ていれる日本のこれからの進路として貴重なご意見をお伺いいたしました。

ABKに最近では珍しいアフリカからの入館者がありとても気になり話しかけてみると、ナイジェリアから約1カ月の予定で母校東大に訪問研究員として再来日したとのこと。ABKには1994年留学で初めて来日した時に3カ月滞在し、この度は久々の来館。背が高く体格も良く大変大きい人で黙っていると威圧感さえ感じる。しかし、話し出すと弁舌で、日本のことに広く通じ話が途切れない。一方、当方ナイジェリアのことは全くと言ってよいほど知らない。よい機会なので、少しナイジェリアのことを通しお話を伺うことに。彼は、ビアフラ戦争(1967-1970ナイジェリア内戦;石油資源を持つ東部州の分離独立宣言に端を発する)で150万人の犠牲者を出したイボ族の出身。長期にわたる軍事政権の後、文民政権に移行して10年以上になるが、日本人の常識ではいまだずんなりと理解できない世界がたくさんあるナイジェリアだ。一方、ナイジェリアへの経済支援に力を入れる中国とそこで活躍するたくさんの方々の中国人のエネルギーには改めて驚かされた。(F)

アジアの友 2011年8・9月号

2011年8月20日発行(通刊第492号)

年間購読(送料共)3,000円(学生2,000円) 1部 500円(税込)

発行人 小本曾 友

編集 アジアの友編集部

発行所 財団法人 アジア学生文化協会

東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)

電話番号 : 03-3946-7565/4121 ファクシミリ : 03-3946-7599

振替口座 : 00150-0-56754 E-mail : tomo@abk.or.jp

ホームページ : (<http://www.abk.or.jp/>)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-7565/4121 ☎+81-3-3946-7599

E-mail : tomo@abk.or.jp

Home Page : <http://www.abk.or.jp/>

「アジアの友」の購読会員(年3,000円・学生2,000円)にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。

ABK の一夜 in タイランド

開催のご案内



We are proudly to invite you
to a memorable Japanese Cultural Night with the objective
of raising Fund for a new Study Building at ABK Japan

One Night at Asia Bunka Kaikan
on 16 October 2011 at 18.00 -21:00 p.m.
at Thai Army Club, Vibhavadee Rd.

You will enjoy Japanese Food,
Japanese Green Tea Ceremony,
Japanese Hand-writing with Ink,
Japanese Art & Craft Activities,
Japanese Traditional Dance,
Photo Taking in Japanese Costume,
Let's get back to our good old days!!
Get a YUKATA free when buying a ticket

More information
ABK & AOTS Dosokai
Tel. 0 2238 5235 - 6



**One Night
@Asia Bunka
Kaikan**
Fundraising
for ABK New Building
16 October 2011
Thai Army Club,
Bangkok, Thailand
Ticket 2,500 Baht,
Get one Haori
Tel 0 2238 5235-6
alumni@abk-aots.org

「One Night at ABK in タイランド」参加と TPA、TNI 訪問ツアー！

ABK タイ同窓会主催で行われる ABK 支援の為のイベント参加をメインに、泰日経済技術振興協会（TPA）及び泰日工業大学（TNI）訪問・見学を加えた ABK ならではのタイ国ツアーです。
皆様のご参加をお待ちしております！

日時	月日（曜）	地名	現地時間	交通機関	行程
1	10月15日（土）	東京（成田）発 バンコク着	午前 午後	JL/ANA/TG	
2	10月16日（日）	バンコク	午前 16:30-21:00		自由（観光） One Night at ABK 参加
3	10月17日（月）	バンコク	午前 午後		TNI 訪問 TPA 訪問
4	10月18日（火）	バンコク バンコク発	午前・午後 夜半		自由（観光）
5	10月19日（水）	東京（成田）着	朝	JL/ANA/TG	

<参加費等詳細はお問い合わせください ☎ 03-3946-4121 >